

令和 7 年度第 2 回岐阜市立新大学準備委員会 議事概要

【日 時】 令和 7 年 8 月 25 日（月）10 時 00 分～12 時 00 分

【場 所】 岐阜市役所 6 階 6-3 会議室

【出 席 者】

（委 員） 杉山 誠委員長、廣田 孝昭副委員長、小野 悟委員、
河野 廉委員、大田 康雄委員

＜オンライン参加＞

斎尾 直子委員、中田 晃委員、吉田 俊介委員

（オブザーバー）伊藤女子短期大学事務局長、若山企画部長、田中企画部大学
改革推進参与

（事務局）＜企画部＞

久富次長兼総合政策課長、小川総合政策課大学改革推進室主幹 他

＜女子短期大学事務局＞

藤田総務管理課長、大西総務管理課新大学設置準備室長 他

1 議事

○杉山委員長

それでは議事に従って進めてまいりたいと思います。

最初に今後のスケジュールということですが、前回活発な議論をいた
だいた結果を踏まえて、1 回余分に審議をするという変更があるようですので、
事務局の方から説明いただけますでしょうか。

◆今後のスケジュールについて

（事務局から資料に基づき説明）

○杉山委員長

どうもありがとうございました。本日の第 2 回会議を踏まえてパブリックコ
メントというスケジュールでしたが、もう 1 回審議を増やしてパブリックコメ
ントを行う流れにしたということです。

何かご意見ありますでしょうか。よろしいですか。（異議なし）

それでは、このスケジュールで進めますのでよろしくお願いします。

本日は第 2 回ということで、基本計画についての議論を進めてまいりたいと
思います。今のことも踏まえて議題を進めるわけですが、前回、どこまでこの準
備委員会が話をするのかを少し整理してほしいといったご意見を頂きましたの

で、資料2を作成し、今どこまで進んでいて、今回は何を審議するのかを整理していただきました。それを踏まえて、皆さんの意見を基にまず岐阜市としての考え方を資料3にまとめ、さらにそれを踏まえて資料4で基本計画（素案）を修正いただいたという形になっています。

従いまして、修正箇所を中心に事務局から説明をいただければと思います。よろしくをお願いします。

◆岐阜市立新大学基本計画（素案）について
（事務局から資料に基づき説明）

○杉山委員長

ありがとうございました。前回の議論を踏まえて修正等を行ったところを説明いただきました。資料2をご覧くださいませでしょうか。本日は、この資料2に基づいて議論を進めていきたいと考えています。

まず、繰り返しになりますが、今説明がありましたように、これまで将来構想検討委員会あるいは岐阜市の中で検討を行ってこの基本計画ができてきたという経緯があり、その間には、新大学設置に係る方針として大学設置の理念を定め、その中には男女共学4年制化や、これまでの経緯やニーズを踏まえて経営系とデザイン情報系という専門の二つの軸を置き、さらにキャンパスを市内へ移転し、市立の岐阜薬科大学も含めて法人化するといった流れを方針として、基本計画を作っていたということです。

さらに、前回の議論を踏まえていくつか修正が出ましたので、まず資料3でポイントを読んでから、その具体的な内容を見ていくという説明だったかと思います。

それでは、資料4はこの後細かく見ていきたいと思いますので、まず資料3に対して何かご意見があればお願いします。また資料4のときでも構いませんが、もしここでどうしてもということがあれば頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。かなり前回の議論が整理され、それぞれのこれまでの経緯を含めて回答があるかと思いますが。

何かございますか。なければ、本日の「審議いただきたい事項」の基本計画（素案）に入ってまいります。よろしいでしょうか。（異議なし）

それでは素案に入ります。ここで大事なことは、私たちがこの素案や計画を作るというわけではなく、岐阜市が計画を立てて、それに対して私たちが諮問を受けると言いますか、より魅力的なものにするために意見を言うていくという位置付けになります。

この後、これを基にパブリックコメントを頂き、次に実際の準備が控えている

という流れです。ですので、市が作る計画に対して私たちがアドバイスするという位置付けで議論いただきたいと思います。

それでは最初にグランドデザインについて、8 ページから 10 ページにまとめられていますが、これについてご意見を頂ければと思います。

それでは順番に頂きましょうか。いきなりで恐縮ですが、小野委員、ご意見があればお願いします。

○小野委員

8 ページにも 9 ページにも、「学生に選ばれる大学」「企業に選ばれる大学」「市民に選ばれる大学」と三つあります。この中で、左側の「学生に選ばれる大学」という表現について、もちろんリカレント教育などいろいろあるので難しいですが、マスとしては「高校生に選ばれる大学」という意味かと思いますので、高校生がこの大学に入りたいと思うことの表現として何かちょっと、と資料を事前に拝見して一番気になりました。高校生がこの大学に入学したいなと思う、大学を成功させる一番はそこだと思っていますので、あえて「学生」としてあるならどういう意図でそうしてあるのかが少し気になりました。

○杉山委員長

言葉の問題もあるかと思います。「学生」と言うと大学生になり、高校生だと「生徒」という言い方になるので、「学生に選ばれる大学」と言ってしまうとどうだろうかというご意見かと思います。

現役の学生がこの大学はいいな、入ってよかったという意味、あるいは他大学の学生がこういう大学で学びたいと思えるような大学という意味だとすれば、それも一つの考え方としてあるかと思います。

今の私の解釈でよいかどうか、事務局におたずねしたいと思います。

○若山企画部長

ありがとうございます。今小野委員が仰ったとおりでありまして、ここは高校生に選んでいただける大学を目指すということを意図して記載したものです。高校生だと「生徒に選ばれる」ということになり、その表現でよいのかも内部で検討したのですが、先ほど杉山委員長が仰ったように、入ってよかったということもあるだろうという意識もあって、最終的に「学生に選ばれる」とした経緯がございます。意図としては、小野委員の仰ったとおり、高校生に選んでもらえる大学という考えが含まれているものです。

○杉山委員長

学生、企業、市民ということが非常にわかりやすくまとめられているとは思いますが、よろしいでしょうか。

それでは河野委員お願いします。

○河野委員

ありがとうございます。大分はつきりしてきたという印象がある一方で、対象を絞るというか「ペルソナ」というか、こういう学生、高校生に来ていただきたいというところは、ここに記載がなくてもしっかりとある程度特定しておいた方がよいのではないかとすることは、前回からお話しさせていただいています。

現在は、大学進学者の約8割が県外へ行ってしまうということですが、この8割がなぜ県外に行っているのかの調査までではないですが、インタビューなどはされているかという点が少し気になりました。

例えば、これはジャストアイデアですが、行きたい大学が県内にないから行っているという学生もいるだろうし、偏差値などもあるだろうし、都市の大学に行きたいからということもあると思います。今三つお話ししましたが、その三つの対象者に対してのアプローチ方法は変わってくるかと思っています。

おそらく、一番目の県内に行きたい大学がないところが対象だろうということはわかるのですが、例えば、都市に行きたい学生に名古屋や東京ではなく岐阜に来てもらうには、本末転倒かもしれませんが、ものすごくきれいな校舎にして、映える大学があるならそちらを選ぼうと思ってもらうなど、対象が違えばアプローチ方法が変わってきますので、対象が絞られているのかが気になりました。

○杉山委員長

ありがとうございます。将来構想検討委員会でもだいぶ議論した部分でして、今挙げられたものは全て対象に入っています。ただ、都会に行って勉強したいというものはどうしようもないのだろうと、それは一つ大志を抱いているわけですので、違う環境で学びたいということはあると思うんですね。

ただ、学びたくてもここにその分野がない、あるいは偏差値は微妙な話ではありますけれど、そうしたところは岐阜市やこの地域が持っている課題だと思います。

学力中間層という表現をしていますが、そうした意味で不本意ながら県外に行っているところをどうするかということは、一つの大きな流れとして整理されているかと思っています。今のようなことでよろしいですか。

○田中企画部大学改革推進参与

ありがとうございます。杉山委員長がお話しされたとおりにかと思います。分析という意味で申しますと、前回の会議で提出した高校生アンケートの中で、県外への進学を希望する高校生にその理由を聞いており、既に行きたい大学が決まっているという学生が一番多いのは当然かと思いますが、他に、学びたい分野の大学が県内にないからですか、進学を機に環境を変えたいという回答が多く出てまいりました。

後者については、杉山委員長が仰ったとおり、確固たる意図をもって県外に行くというのは一つの選択かと思いますが、学びたい分野の大学が県内にないと回答した学生をクロス集計で見ますと、特に愛知への進学を希望している学生が多いという結果が出ています。そのような意味でも、今回の新大学のターゲットは地元、あるいはその近くで学びたいがその分野や自分に合った大学がないという学生をターゲットにしていますが、それがデータからも示されているかと思います。

○杉山委員長

従いまして、この後の教育内容が重要になってくるということになります。どうもありがとうございました。

それでは斎尾委員いかがでしょうか。まずこの 8 ページから 10 ページのグラウンドデザインのところでお願いします。

○斎尾委員

確認です。8 ページの「学生に選ばれる大学」は、この資料では高校生に選ばれるという意味のみで記載されている。リカレントは「市民に選ばれる大学」に入っているということでしょうか。そうすると、「学生」という用語は大学生以上、高校までは一般的に「生徒」というのがよいのかどうか。質問は、「学生に選ばれる」とはどのような意味を指すのだらうと疑問に思った次第です。

○杉山委員長

私も最初そう思いましたので、言葉の定義から言えば、高校生と読みづらいというのは仰るとおりです。

○斎尾委員

同じ 8 ページの左の「学生に選ばれる大学」のところで、「まちも、企業も、市役所さえも」の「さえも」とはどのようなニュアンスでしょうか。

○杉山委員長

いろいろな表現がありますので、少しこの辺りは考えた方がよいかもしれません。私もちょっと違和感がありましたので。

後は「学生」に関して、学び直しというフレーズがあり、社会人の入学についても考慮すると単なる「リカレント」とは違う話もありますので、もしかしたら若者も…若者に限らないかもしれませんが含まれるかもしれませんので、この辺りは少し考えた方がよいと思います。

私もちょっと違和感があって、最初「学生」というと高校生はどうなのだろう、でも高校生のことを言っているのだろうと考えましたので、検討の余地があるかと思います。先ほどの小野委員と同じ視点かと思います。どうもありがとうございます。

それでは中田委員お願いいたします。

○中田委員

グランドデザインに関して、これまで私は、先ほど説明のあった資料 3 でも計画の位置付けやプロセスの説明について意見を申し上げてきたので、引き続きで申し上げようと思いますが、これは決して計画に否定的だとか後ろ向きということではなくて、やはり大きな課題をきちんと乗り越えていくことによって計画自体が強くなるといいますか、政策として頑健なものになるということで発言させていただきます。

今、進学先について 8 割が県外とありましたが、これは例えば岐阜市の自宅に住みながら名古屋の大学に通う人も県外進学者になっていますよね。そういうことを考えると、岐阜市にしっかりと根付いて暮らしている人が、たまたま学校は名古屋に行くぐらいのことは別になんだろうなという気もするんです。

何が言いたいかというと、繰り返しになりますが、基本的に今、我が国の高等教育政策で大学は要らないと言われていています。多すぎる、どうやって減らすか、どこから減らすか、誰から減らすかと。あまりにも減らしすぎて、その分野への進学先がなくなったらアクセスも考えなくてはという、国を挙げてそのような議論をしているときに新しい大学を作るというからには、このグランドデザインのところで「グランドデザイン」を描かないといけない。つまり、どんな大学がよいかということは各論として非常に重要なことであって、これからしっかり議論していかなければいけません。グランドデザインに各論の要約のようなことを書いているくらいではやはり少し弱いのではないかと思います。

今、我が国の大学が多すぎてどうやって減らすかという中で、それでもあえて新大学を作るためのグランドデザインはこうだと、それは何を置いても岐阜市としての政策であると。岐阜市にはこうした大学がまちの中心部に必要であっ

て、その大学を中心として岐阜市のあらゆる行政課題についてしっかりと取り組んでいくという、政策としてのグランドデザインを描かないといけない。

今後作っていく大学の姿は具体的にこれから詰めていかなければならないので、ここに書いてあること自体は否定されることではないのですが、その要約のようなことをグランドデザインと称するのでは、様々な反対意見をもった方もいらっしゃるかもしれないし、議会も通さなければならないし、パブリックコメントで市民の方になるほどと言っていたかなければならないときに、私にはちょっと弱く感じます。

大学としてどのようなものを作っていけばよいかというのは大事な議論ですが、大学は要らないと言われていくことにきちんと向き合い、それを乗り越えていくためには、やはり岐阜市の大きな政策としてのグランドデザインが前に出たものでないと通らないのではないかとというのが、資料3の29、31と私は一貫して意見は変わっていませんけれども、大事なところではないかと思います。

これは決して後ろ向きなことと言っているわけではありませんので、ご理解いただければと思います。

○杉山委員長

どうもありがとうございます。後ろ向きではなく、より積極的に進める中でポイントとして重要だというのは仰るとおりだと思います。

とは言いながらも、これは岐阜市の政策の中で動いている話だろうと思いますので、その中で何が足りないのか、どうしたらいいのかというときに、活性化を一つのキーワードとして作られているのも事実かと思います。これは将来構想検討委員会でも議論してきたものです。そのインパクトが少々弱いのではないかとというのがおそらくご指摘のポイントだと思います。

他方で、岐阜市から名古屋に通えばよいのではというご意見もありますが、名古屋に1時間半から2時間かかって通っている、24時間のうち3時間、4時間かかっているという事実もありますので、現実として、こちらの方により魅力的な大学を作るとは非常に重要だと思っています。

ただ今の中田委員の意見に、岐阜市から何かありますか。

○若山企画部長

ありがとうございます。新大学を設置することに関する議論というのは、先ほどの説明にもありましたとおり、我々としては令和3年度から4年、常に検討を続けている状況です。

大学の必要性に関しては、例えば今回の計画で言うと7ページの「新大学の必要性と設置の意義」という部分に記載しています。元々は岐女短のあり方から

議論を出発していきまして、庁内での議論、そして杉山先生にご尽力いただいた将来構想検討委員会の中でも、岐女短をどうしていくべきかという議論の中で、現状、新大学を設置することが最良の方向性であろうという結論が出ていると我々としては認識しているところです。

新大学の必要性については、人口減少時代にあって人材育成が今後最も必要な政策であろうということ、そして地方創生という観点で言いますと、大学の持つリソースを地域に還元し、大学として地域貢献してもらうことが重要であろうということで、大学の設置が必要であろうという議論がこれまでなされてきました。

そうしたことから、7ページに新大学の必要性を集約したところですが、それが弱いとなると、この点についてもう少し深くこの計画に書き込んでいく必要があるのではないかと今考えております。

○杉山委員長

ありがとうございます。中田委員いかがですか。

○中田委員

この資料の作り方を見ても、岐阜市が大変丁寧に取り組んでいて、手間暇をかけながらやっていることはとてもよくわかります。ですから、非常にレベルの高い行政的なしつかりとした組立の仕方をされていると思うのですが、今、大学が置かれている状況に対する温度感といいますか、そういうところが少し異なるのを感じなくもありません。

このグランドデザインは、まずどんな大学であるべきだということが書いてあり、キャンパスの立地の部分はあまり触れられていないのですかね。ただ、実際に大学を使って、市の政策、市の中心街やそこに展開している大学以外の様々な行政の要素との連携を考えていくには、大学が誰々に選ばれるということももちろん本当に大切なことですが、市としての大きい行政的な絵姿を最初に描くべきなのではないかということは、頂いたお答えは十分なお答えなのですが、思います。

それから、名古屋に通うのにそんなに時間がかかるのでしょうか。

○杉山委員長

名古屋と岐阜の特別な関係があると思うんですね。JRだと駅間はわずか20分しかありませんが、岐阜市内で動く、名古屋市内で動くとなると、結局1時間、2時間かかってしまうのが現実です。近いようで遠くないと言いますか、ここには非常に微妙な人の流れがあります。岐阜から名古屋、愛知へという流れがあり、

そのまま帰ってこないという中で、この地域をどうするかというのが今、課題になっています。

こうしたことが特殊な事情としてあるかと思います。よろしいでしょうか。

○中田委員

名古屋市内でも同じような感じがしますが、守山区から通うとか。

○杉山委員長

それでも大きな違いはあると思っています。本数の違いなどもありますし、単純には言えないということですね。

グランドデザインについては、それがどうしてまちの中へということでの後に続きますので、そこでまた議論いただければと思います。どうもありがとうございました。

それでは廣田委員お願いします。

○廣田委員

前回もいろいろお話しさせていただきましたが、私どもの立場から言えば、とにかく市の活性化と中小企業の活性化に繋がる大学があってほしいというのが一番の望みです。

人手不足の折、企業の採用において、地元の人や岐阜市近郊に住んでいる人と、名古屋市や愛知県から通っている人では、他県の人の方が離職率が高いんです。やはり地元の人の方が非常に定着率が高い。これは事実でして、ですから余計に大学についても、地元のしっかりとした大学というものがあってほしいということをお我々企業側からすれば強く感じるところです。

大学もそうですし、全てが都市間競争になっていると思いますので、大学の自身について、行きたい、学びたい分野とは何かということからは、もう一回追求するべきではないかという気もしています。

また、我々企業側としては連携について、私は特にアパレルなのでデザイン情報科学科をもっと強化していきたいと思っていますし、海外との連携も業界として重視しており、フィレンツェは姉妹都市でもあるので、ここのポリモーダというファッション専門学校との連携なども岐女短が元々進めてみえることですから、これをもっと強化し、企業との連携という方向に結び付けていけたらよいと強く感じます。そうした何か強いもの、付加価値というものを作り上げていっていただきたいと思う次第です。

そして、地元ということが本当に非常に強い。先ほど申し上げたように定着率が高いということは事実でして、やはり近くにあり通えることの強みは、大学も

同じだと思います。そういう意味では、我々企業にとっても地元の人にとっても、大学が地元にあってほしいと思います。

これも決定済みのことだと思いますが、岐阜市には今まちの中に空いているスペースがたくさんあります。それらの活用についても、新しい大学をどうするかということと繋げて考えていっていただきたい。これが市の活性化に繋がると思いますので、そういう発想で進めていただければ幸いです。

大学の内容をどうするかということを専門家、先生方に考えていただければと思いますが、ぜひともそのような形であってほしいと思います。

○杉山委員長

どうもありがとうございます。産業界からのニーズというのは、今ご説明がありましたが、先ほどの中田委員のご意見への回答にもなっているかと思います。

こうしたことが岐阜市や岐阜地域にはあるということをご理解いただければと思います。どうもありがとうございました。

今のご意見の内容はこの後に繋がってくるのかと思いますが、これまで培ってきたものとして、イタリアのフィレンツェという言葉も非常に強みとしてあると思います。

岐阜市から何かありますか。

○伊藤事務局長

今、廣田委員からフィレンツェの話がありましたが、岐女短はかなり前からポリモーダという総合的なデザインの専門学校と連携協定を結んでおり、何回か行き来するなどの形で繋いできています。また、他の大学などとも当然連携していますので、今後、こうした本学のいろいろな連携も生かしながら新大学に繋がっていききたいという方向で考えております。

○杉山委員長

この後の議論に入っていくと思います。またよろしくお願いします。

廣田委員よろしいでしょうか。（異議なし）

それでは吉田委員お願いします。今日初めてのご参加ということで、これまでの経緯や説明は事務局が行っているかと思いますが、ご意見を頂いてよろしいでしょうか。

○吉田委員

京都橘大学の吉田と申します。前回参加できず申し訳ありません。

議論をいろいろと見せていただき、前回の議事録も少し拝見して、市民が必要とするような地域に根差した大学ということかと理解しています。

まちなかをキャンパスとして使うというのは非常に良いアイデアだと思っています。過疎化の進行やコンパクトシティのような話があると思いますが、まちなかにしたとしても、高齢者の方がいるのに周りに若者がいないという環境ではやはりちょっと厳しいと思われますので、まちなかに若者を呼び込んで、その方々と共生できるようなまちづくりというのは非常に良いアイデアだと私は思います。

先ほど話が出ていた 8 ページの学生についてですが、日本は学生というと高校から進学して大学へということが多いんですけれども、その辺りの考え方を変える必要がある気がします。リカレントだけ「市民」の方に置くかどうかという話で、学びたい人たちという意味合いではやはりそれは学生になるのかと思うのですよね。

一方で、ここの「市民」に何があるかという、先ほどから地元で根差した大学で行きたいという話があるので、例えば私たちのような私立大学だと、ちゃんと独立採算でやっていけるように規模をどんどん大きくして学生を増やし、頂いたお金などで運営できるような形を目指しますが、おそらくそこまで規模を大きくする大学ではないと思っています。そうすると、赤字が出たときに補填しなければいけないという話にきつとなると思うのですが、その費用負担を市民にお願いするのであれば、市民の方々も納得できるような大学でないと難しいのではないかと思います。

そのときの一つのアイデアとして、先ほど仰っていたようにまちなかを大学にする、学生も呼び込める、地域にとっても非常にありがたいといったことが「市民に選ばれる」という部分には必要なのではないかと思います。

岐阜市がどれくらい農村部までタッチしているのか、広がりがよくわかりませんが、もしコンパクトシティということであれば、農村の方々をまちなかに呼び込むための起爆剤として大学があるのかもしれないかもしれません。若者がいるところをうまく創り出すことで良いまちを作るとい、市ならではの政策というところにも踏み込んでこの大学というものが必要ではないかと思いました。

○杉山委員長

ありがとうございます。後の議論にもつながる話かと思います。岐阜市が大体 40 万人くらいの都市ですので、周辺を合わせると 100 万人くらいの規模ですね。大体そのくらいのサイズ感の都市ですので、そうした中で若者が流出しているという現状を踏まえてどう考えるかは一つ大きなポイントで、先ほど廣田委員が仰ったことに繋がってくるかと思います。よろしいでしょうか。

岐阜市から何かよろしいですか。

○田中大学改革推進参与

ありがとうございます。中心部への大学の立地を目指していることは現段階で書かせていただいている、吉田委員のご発言、それから中田委員からのご指摘にも繋がると思いますが、まちの活性化や地域づくりの中核となるような大学像を目指す上で、単に大学が人材育成の場として必要というだけではなく、キャンパスを生かすことや、人の交流の場としての意義を果たすため、市の政策としてもっと広い視点から、大学がどうあるべきか、岐阜市の中でどういう政策的な意義を果たしていくべきかということをより深く考えることで、計画が一層充実するのではないかということ、委員の方々の議論を聞いて思いました。少しお時間を頂きましたので、改めて考えていきたいと思っています。

○杉山委員長

どうもありがとうございます。「学生に選ばれる」について、その辺りの整理は必要かと思っています。この辺りは議論して、おそらく社会人の学び直しというのがここに入ってくると思いますが、そうしたものも含めて考えないといけないと思います。

いろいろな意見がありましたけれども、大田学長、実際に岐女短を運営しながらいかがでしょうか。

○大田委員

ありがとうございます。前回の議論を踏まえて、グランドデザインが少しはつきりしてきたかと思っています。先ほどから言われていますけれども、要は、大学を巡るステークホルダーに対してどのような価値を提供できるかということに尽きるかと思っていますので、この辺りにもう少し刺さるような文言を考えていければと思います。

後は、これは中身の議論になるかと思いますが、10 ページに二つ学部があり、いわゆるビジネスソリューションに関わる部分と、デザインの専門職とがありますけれども、おそらくこれは別々ではなくかなり一体化していき、行き来するぐらいの形でやるのがこの大学の特色の一つだと感じます。ここに「相互交流を促進」とありますが、見せ方としてもう少し重ねられる部分を作るなど、その中身をいろいろと後半でご議論いただければと思います。

すみません、雑駁な意見ですが。

○杉山委員長

どうもありがとうございます。

今、次の議論に話が進みましたので、教育研究の内容について 11 ページから見ていきたいと思います。

資料 3 の 11 ページからまとめられていますが、専門性や人材のこと、少し細かいところ、そして実際の組織と続いてきておりますけれども、何かご意見ありますでしょうか。

私から、今の太田学長のコメントとも繋がりますが、大学全体でどんな人を育てるかということがあまりきちんと書かれていないというのが、実はここを見て感じました。

総合的に活性化するのであれば、やはり大学全体でこういう人を育てるという教育ポリシーや、自律的な、主体的な、あるいは多様性といったキーワードがあると思います。そうした学生をちゃんと育てていき、その中で専門性を身に着けるというような 2 階建てと言いますか、そこでおそらく共通科目というものが出てきますので、それがここではいきなり専門に入っているのは少し感じる場所です。

他にいかがでしょうか。

○小野委員

11 ページ、12 ページを拝見して、多分とても苦労して作られたのだろうということはずごくよく感じました。その上で少しだけ気になったと言いますか、やはり本当にいい大学を作っていただきたいので、あえていろいろ申させていただくのですが、12 ページのデザイン情報科学部の方は、身に着けさせたい資質がデザイン力であり、デジタル技術であり、クリエイティブ性であり、そしてそれを持ったエンジニアを育てていきたいということがよく読み取れます。

それに比べると、社会共創学部の方は、言い方は悪いですが形容詞だらけで、身に着けさせたい力がマネジメント能力しかないように見えます。

私としては、社会共創学部の方であれば、身に着けさせたい力は経営学であり、ものごとをデータの視点から科学的に扱うデータサイエンティストの能力であり、そこに起業家精神なりが加わってくるかと思うのですが、その辺りのところが、しっかり書かれていないように思います。形容詞などを多用し、いろいろと書いてあるのですが、形容詞などを取り払ってしまってもっとシンプルに書かないといけないと思います。

もう一つ、11 ページ、12 ページで書くべきことは 3 つあるかと思います。一つは「教育や学びの手法」をまずしっかり書く。一つは「身に着けさせようとする力・専門性」をしっかりと書く、そして「育てたい人間像」を書く。そして、

二つの学部に共通する部分があるならまずそれを書いておき、先ほど杉山委員長も言われましたが、その上で個々の学部について書いていく形にしないと、本当にごちゃごちゃになってしまいます。現在の案では、「学びの手法」と「身に付けさせようとする力」、そして「育てたい人材」がごちゃごちゃになっているという印象を強く感じますので、そこをしっかりと書いていただきたいと思います。

構成としては、最初に、これがこの新しい市立大学の学びのスタイルであるということを掲げ、その上で、社会競争学部では・・・、デザイン情報科学部では・・・、という形にするとよりわかりやすく、高校生も選びやすくなると思います。多分今のままですと、結局どんな力を身に付けさせたいのだろうということになります。

資料を見ると、「専門性の軸」の後にある中ポツ3つは両方とも一緒なのですよ。例えば、この部分が両学部に通ずる部分なので、それを前に出した上で、2つの学部に降りていく形が良いと思います。前もお話ししましたが、今の子どもたちは、4年間で、何を学び、どんな力をつけていくのかということに昔に比べてとても大切にしていますので、そこをしっかりと書いていただけるとありがたいと思います。

○杉山委員長

今のお話について、教育の3ポリシーというのがありますよね。アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、それからディプロマ・ポリシー。その辺りのところを整理して書かれると、今の回答となるように思います。

それから、大学全体ではどうする、専門ではどうするという部分を整理すると、もう少しわかりやすくなる気がします。

いかがでしょうか。他にどうでしょうか。

○河野委員

今のお話に少し付け加えさせていただくと、ここに「輩出する人材像」とありますが、新ビジネスを創出する、新しいビジネスクリエーションという話も出ていたと思いますけれども、先ほど廣田委員からありましたように、地元中小企業に人材が不足しており、地元で働いてほしいという思いがあるという背景をお聞きして、現状の課題と輩出する人材、ビジネスクリエーションする人がマッチするのかがちょっと、とても不安に思いました。

その人たちにはできれば岐阜市に残って働いていただき、地域を活性化させたいという思いがある中で、名古屋や東京へ行く可能性もあると思いますので、岐阜市の魅力や、卒業した後のキャリアパスの像がもっと見えるようにすると

よいのではないかと思います。

岐阜市について、岐阜市立の強みや、岐阜市全体をフィールドにと書いてはあ
るのですが、先ほど話があった連携してやるという具体性や、グローバルに繋が
るものが見えてきたら、じゃあ行こうという選択の余地が出てくるのではない
かと思いますので、そういうところが見えてきたらよいと思った次第です。

○杉山委員長

今の河野委員のご意見も非常にわかりやすく、小野委員のご意見とも繋がっ
てくると思いますが、やはり具体的なものや、分かりやすいイメージがあるとよ
いと思います。例として挙げるだけでも、例えばフィレンツェという言葉が出る
だけでも大きく変わってきますし、そうした工夫は少し必要かと私も思います。

今廣田委員のお話が出ましたが、いかがでしょうか。

○廣田委員

これをまちなかに持ってくることは一つ大前提としておありになる。これは
もう絶対そうしていただきたいと思います。それがまちの活性化に繋がります。
先ほど申し上げたように、本当に空いている部分がたくさんあって、これをうま
くキャンパスとして活用できないかということは非常に思いますし、岐阜市の
活性化に本当に繋がることですから、そうしていただきたいと思います。

そして企業との連携について、先ほどの専門的な分野というところで、強い専
門性をどこに持つのかを考えていただければ、企業との連携にも繋がっていく
のではないかと思います。どこの企業も悩んでいるところは同じだと思います
ので、ぜひともお願いしたいと思います。

○杉山委員長

今、議論の中で、どうしても岐阜にいる人が外に行かないようにするというイ
メージがありますが、反対に名古屋から岐阜に来るパターンもありますので、そ
れだけ魅力ある学校ができれば、今の人の流れが全く変わってきます。

私は名古屋出身なのでわかるのですが、岐阜市の持っている面白さがあるの
ですよね。小さいながらも一つのまとまりがあることや、生活のしやすさなど、
そうしたものの見せ方は一つやりようだと私も思っていますので、そこをどう
作っていくかだと思います。

今 Web で参加いただいている斎尾委員、まちづくりという話が今出てきてい
ますが、いかがですか。教育内容との繋がりのようなところですね。

○齋尾委員

教育内容とまちづくりとの繋がりに関して、私は、「都市全体をキャンパスに」というコンセプトをととても評価しています。一方で、言葉や用語の使い方は関係者や市民に理解してもらえるように、という観点で資料を見ています。

13 ページ前後、二つの学部の名称について、社会共創とデザイン情報科学としており、「デザイン」という用語が使われているところが非常に気になります。「デザイン」という用語は、ここでは、幅広の意味、広義で使っているかと思います。幅広の意味とは、いわゆる見た目やスタイリングといったデザインではなく、プロジェクトを動かしていくことや仕組み全てを含む意味のデザインです。コミュニティデザインのような用語もあります。この広義の「デザイン」ですと、社会共創学部の方も教育内容はデザインではないかと思った次第です。学部の名称について、今現在は仮称とはいえ、「デザイン」という用語の使い方なども気にしつつ、委員の方々の意見を聞いていました。

○杉山委員長

ありがとうございます。おそらくデザイン思考というものが全体で後ろに流れているのだと思いますが、その中で特出しでデザイン情報科学と出てくるとどうかということは、確かにあると思います。その辺りについて、まだ仮称ですので、今後考えなければならない部分かと思います。

どうもありがとうございます。

○齋尾委員

先ほど、イタリアと岐阜市は関係があるとの話がありました。大学の建築学科に所属している立場でデザインの授業もやっていますが、例えば、ブルーノ・ムナリというイタリアのデザイナーが、スタイリングや見た目はデザインではないということを言っています。何かを作っていく過程や仕組みを含めてデザインだということです。一般的には、デザインというと「見た目」のみに捉えられがちなので、その用語を使用する場合は気をつけるべきかと思います。

○杉山委員長

ありがとうございます。仰るとおりかと思います。

吉田委員いかがですか。

○吉田委員

私は情報が専門ですので、学部名称も含めて見ていたのですが、仰るようにデザインに入っていることがちょっと違うような気もしています。

と言いますのも、今回、二つの学部の中身を見てみると、どちらも起業家精神を養うことや、デザインと呼ばれるような部分や、クリエイションといった部分が入ってきていると思います。

今ご説明があったように、よくアートとデザインは何が違うのかという話がありますが、アートは見た目の部分も含めて表現をしていくということになりますが、デザインには必ずターゲットがいるのですよね。誰がどう使うかに落とし込んでいく作業がいわゆるデザインで、エンジニアリングの世界でもデザインの話になることがあります。

そういう視点で見ると、この社会共創学部も、地域課題に対応できるようなアイデアを出しつつ、それを経営学の視点で解消していくということになりますので、やはりデザインの話が入ってきます。

もう一つ、データサイエンスがキーワードに入ってきていますが、これからの世界ではもうデータサイエンスはベースの技術として、そろばん並みというか、電卓並みに使われる技術になっていくかと思います。

おそらくこのデザイン情報科学部の方に書かれている「データサイエンス」と呼ばれるものも、国立大学でやっているような、計算をしてアルゴリズムから作って効率化していくといったことではなく、あくまでもツールとして使うということかと思いますので、この指向性を見ていると、社会共創学部はリアルをフィールドワークしながら、リアルの課題をリアルの世界で、デジタルなツールも当然使いながら解消していくというようなアプローチの学部に見えますし、後者のデザイン情報科学部はフィールドワークも含めて、バーチャルな世界、デジタルな世界でやる方向性のもので、要はリアルなインフラをターゲットにしながら、リアルの世界をデジタルで補強していくものと、バーチャルなインフラをターゲットにしながら、バーチャルな世界での方法論を考えていくものという、そのような方向性の違いを若干感じます。

いずれにしても、デザイン情報科学部でコンピュータサイエンスをやるのが合っているのかがちょっとわからない印象ですね。

もう一つ補足しますと、最近アメリカなどではコンピュータサイエンスが凋落してきてしまっていて、入学した当初はコンピュータサイエンスバブル、コンピュータサイエンスに入ったら年収何千万円のような世界でしたが、それが AI のせいでがらりと変わってしまっています。卒業してすぐの学生が作るくらいのプログラミングはもう AI ができてしまうので、これまで上級エンジニアが切り分けて下流のエンジニア、新卒レベルの人たちに振り分けていた細かい仕事がどんどんなくなって、AI エージェントに任せるような世界が実際にもう来そうなんですよ。

ですので、プログラミングやデータサイエンスも、ツールとして使うのは重要

で、チェックする能力などはとても重要なんですが、あまりそこばかりを追求するのも岐阜市がやる大学として大丈夫かなという印象があります。

それよりは、岐阜市が抱えている社会課題なども含め、名古屋地域の人もここに来て学ぶと起業家スキルやデザイン能力がすごく身に付き、リアルワールドでもバーチャルワールドでもどちらでも対応できるような人材になるというような話の方が、選んでもらいやすいのではないのでしょうか。

○杉山委員長

どうもありがとうございます。やはり結局はどんな資質を輩出するかということになるのではないかと思います。学士の括弧書きに何を出すのか、経営か情報かということも考えなければいけませんので、そこを考えた上で、ネーミングをどうするかになるのだろーと思います。

今のところ、まだ学部名は仮称という段階ですが、岐阜市からいかがですか。どういう人を育てるかが重要になってくるということだと思いますが。

○伊藤事務局長

ご意見ありがとうございます。私どもも学内で検討し考えている過程で、今このような形で出ていますけれども、今いろいろとご意見を伺って、先を見据えた中での教育や研究をさらに詰めなければいけないと感じています。

人材については、公立大学なので、地域に貢献する、地域に輩出して地域で活躍する人材を育てることがやはり第一ですので、将来構想の方向性を踏まえて経営や地域活性化、さらにそれに即して相互に作用していくデザインや情報という分野の設置を考えています。この方向性は大きく変わらないとは思いますが、皆さんのご意見も踏まえてさらに詰めていきたいと思っています。

○杉山委員長

ありがとうございます。中田委員いかがでしょうか。これまでの教育内容等のところですが。

○中田委員

ありがとうございます。私はどの学部がよいかといった専門的なことはわかりませんので、今のご議論はどれも納得できるものだと思って聞いておりました。

吉田委員が仰ったように、非常に短期間で社会情勢がどんどん変わっていく状況があるということをどう見るかと言いますか、8年後までに設置すると、学生が実際に卒業するのが12年後となって、12年後の社会をどうやって予測する

かがやはり問題かと思います。

ですから、大学があり学部があり、そこに通常のカリキュラムがあつてという大学の姿が 12 年後も継続しているかは、それを言うてはおしまいではあります、わかりません。通信制の大学もどんどん出てきていますので、そうしたことも含めて社会がどう変わっていくのかを我々は読み取らなければなりません、それは大変難しいというのが私の感じていることです。

○杉山委員長

どうもありがとうございます。本当に時代があまりにも急激に動いており、転換点に今あるというところで、どう読むかは大変難しいことだろうと思いますが、大田委員いかがでしょうか。

○大田委員

前職が企業でしたので、ここに書いてある『高度なマネジメント能力』を養成」というところはちょっとぼやっとしているように思います。これは私なりのイメージなのですが、おそらく、5 名くらいのプロジェクトを差配できるような人材、入社 1 年目くらいに任せてみようかと思えるような人材を育てていくことではないかと思います。先ほど例の話がありましたが、そういうことを例として出すとわかりやすい気がします。

その場合、経営の基礎やリーダーシップなどを共通の素養として涵養していくことが非常に重要かと思います。

後は、学科の様々な分野の流行り廃りというものが非常に私どもも気になっていまして、ご承知のとおり、過去にバイオブームであらゆる工学部がバイオの学科を新設し、企業が採用するときにミスマッチが起こって、卒業してもなかなかバイオ系の企業に入れない人が非常に増えたことがありました。

ですから、方向性としてはこれがよいと思いますけれども、できるだけつぶしが効くと言うと語弊がありますが、基盤や地頭を鍛えるというところにプログラムや重点を置いて、流行り廃りがあっても、そこは上乘せとして変えていけるような仕組みが必要だと思いました。

○廣田委員

私どももアパレルにおりまして、今本当に生成 AI というものが進んできて、デザイナーという職業は要らなくなると言うと語弊がありますが、最後にその生成 AI が考えたことを目利きできる人材、これはまさしく 11 ページの輩出する人材像の 2 つ目、「データ分析や AI 等の最新のテクノロジーを駆使し、先見性・革新性・企画力・実行力を発揮する能力」の通りですけれども、そのような

人材が必要になってくると思います。

いわゆるデザイナーという職業自体が段々減ってくるだろうと思います。このような言い方は本当に大変申し訳ないですけども、我々は人材の効率化を図れることに繋がってくるのですが、そうしたものはもう全てAIができると思います。簡単に、全てできてきますが、最後にその目利きができるかどうか。それだけの情報力や先見性を持っている人材は、これから本当に必要になってくると考えています。我々起業家としてはそうした人材を大いにほしいと思いますので、きちんと育てていただければ幸いです。

状況はもっと変わるかもしれません。8年後、12年後も予測できない、3年後でもどう変わるかわからない世の中になってきていますので、非常に難しい状況だと思いますから、少なくともそういうことをベースに、早く、要点を集約して、このような人材を輩出する、創り出す、育てるということをまとめて、大学を作ることを考えていただければと思います。

○杉山委員長

ありがとうございます。AIというのは、歴史というか、過去にあったものという意味では、クリエイティブの部分は残るんだろうと思いますが、何がクリエイティブかという点で、なかなか難しいのではないかと思います。

その意味では、今提示している「輩出する人材像」の二つ目の四角が重要になってくると感じました。

後は、何かご意見ありますでしょうか。

私から、このページではなく18ページの「附属機関及び役割」のところですが、ここにもう少し社会とつながるようなセンターがあるとよいと思います。産官学連携はあるのですが、例えばインターンシップのような、学生と社会を繋ぐようなものがないのではないのでしょうか。キャリアデザインやキャリア支援、学生と繋がるボランティアもそうかもしれません。そういうところが一つあってもよいと思います。

また、国際交流について、先ほどイタリアの例が出ましたが、岐阜市が姉妹都市と繋がっているはずですので、そこを活用するといったことを少し例示として入れていくともっとイメージしやすくなると思います。

それから、学生が運営に参加することが少し入っていますが、東工大が東京科学大学に移行して、そこで学勢調査、学生が運営に携わるといったことをやっていたかと思います。こうしたものも例として面白いと思って注目しているのですが、斎尾先生いかがでしょうか。

「勢」と書く学勢調査で、様々な運営に学生が携わる仕組みを作っていて、諮問をするなど、そうしたマネジメントを学生がやることはとても大事な視点かと

思います。教育の観点もありますし。

○斎尾委員

直接関わっていないので印象ですが、学生が主体的にかかわる仕組みというのは重要です。

○杉山委員長

そうですか、学勢調査という形でかなりやっている印象です。ネットの情報でするので、具体的にどうかはわかりませんが。

○斎尾委員

公募に応じた学生グループ、WG が主体となり、2 年に 1 回キャンパスライフの全てに対して、全学調査を実施し、それを元に報告書を作成、幹部に提言、というスタイルですが、全学の教員・職員・学生に周知されているかどうかは課題かもしれません。

○杉山委員長

単なるアンケート調査ではない形が見られます。国際通用性という観点では、いろいろな認証を見ていると学生が参画することは非常にポイントになっているようですので、そうしたものもちょっと意識できればと思います。

○斎尾委員

学勢調査以外では、近年は、様々な大学で、キャンパスの中に学生だけで運営して使う自分たちの居場所が少しずつ増えてきている傾向です。ラーニングコモンズの居場所の運営や、キャンパスツアーなど、利用者参画型の動きはとてよい傾向だと考えます。

学勢調査の詳細は調べておきます。

○杉山委員長

わかりました、まだ浸透していないということかもしれませんので、またその辺りはこちらでも少し調べます。

○斎尾委員

情報があればまたお知らせします。

○杉山委員長

よろしいでしょうか。それでは5番目の「キャンパス・立地・費用」、26ページと27ページについて、岐阜市全体をキャンパスとしていくという方向性の中で、まずこれは斎尾委員にお聞きしたいと思うのですが、よろしくお願いします。

○斎尾委員

「都市全体をキャンパスに」というコンセプトは高く評価しています。それをどう体現するか、ということ。現在の岐女短キャンパスを新大学のメインキャンパスにする案、中心市街地に近い立地に新キャンパスを建設する案などいくつか出てきましたが、これをどのように決めていくかが重要だと思います。

例えば、メインを今の岐女短キャンパスとする場合、キャンパス新設ではなく、リニューアルとコンバージョン計画・整備となります。新敷地に整備する場合は、現在の岐女短キャンパスの再・利活用とセットで検討する必要がある、市立大学ですので、市のまちづくり方針、都市再生方針に沿って、併行して進めていくべきだと思います。

後者の、新キャンパス整備と決定した場合は、きっちり時間をかけてマスタープラン（長期計画）を策定すべきです。いわゆるこれまでの大学施設整備にこだわることなく、新大学の学習プログラムに沿った魅力的な空間計画が必要なので、基本構想・計画、基本設計・実施設計に時間をかけ、特に基本構想・計画に数年間とって、市民の参画も含めながらやっておくと、関係者の理解も得られていくと思います。

31ページのスケジュールにX-5、-4とあり、その下に「整備計画策定」や「基本設計」とあり、その整備計画策定の辺りは市民と一緒にマスタープランを作っていくような大事な期間だと思うので、簡単に短期間でどこかに丸投げせず、ここをしっかりとやるべきだと思った次第です。

関連して確認です。最初の「基本計画の位置付け」について、この資料全体を基本計画というのですよね。この「位置付け」というタイトルがあるのですが、4から6ページにあるのはこれまでの議論の経過であり、これも大事ですが、「基本計画の位置付け」の位置付けに対応する文章がないような気がします。市が目指すまちづくりや総合計画、市が目指す教育や生涯学習の基本計画等の各種計画との関係性や、この文書の意味、意義、定義といったことが最初にあるとよいのでは、と思いました。

キャンパス計画整備については、二つの学部が決まり、敷地さえ決めれば、あとはキャンパス整備を外部に発注すればよいといったものではなく、基本構想・計画を責任をもってやっていくことが重要かと思います。

○杉山委員長

ありがとうございます。岐女短をどうするかということから議論が始まっているためどうしてもこのような作りになっていますが、大事なのはその中で岐阜市というまちをどうしていくかということで、それがここに入ってきますが、そういう意味ではその関係がしっかりと書かれていないのは事実かと思います。少し経緯の話ともつながってくるかと思います。

この辺り、廣田委員がお話しされていたかと思いますが。

○廣田委員

斎尾先生にお聞きしたいのですが、キャンパスをいろいろなところということで、岐阜市内に空いているところがたくさんあるという話をさせていただきましたが、これをどう活用するかという具体案を詰めていかないと何も進まないのではないかと思います。とにかくまちなかに出す、共学にする、4年制にするということはもう確実に決まっていることだという認識でいますが、その中で岐阜市の活性化として、本当にたくさんある空いたスペースをうまく新しい大学のキャンパスとして使うには、具体的に何を置くのか、どう使うのかということをお教えいただきたいと思います。

○杉山委員長

ありがとうございます。今のようなご意見ですがいかがでしょうか。そうすると2拠点ではなく、やはりもう全面市内移転という流れかと思うのですが。

○斎尾委員

市では、グラウンドなどの運動施設について、設置基準にあるので確実にその面積等が確保できる敷地を、と言われていたような気がするのですが、文科省のキャンパス施設整備の方に確認したところ、そこは特にこだわる必要はないということです。市が今後長く市民の支援や応援を得られ、末長く継続する市立大学を運営していく、ということであれば、まちなか中心市街地の再生とセットで機能が近隣で点在している、というやり方もあり得ると思います。

一つの敷地で設置基準通りの機能を壁の中に閉じ込めるのではなく、大学経営本部と二つの学部、それぞれがまちなかに入り込んでいくというやり方もあるし、例えばグラウンド（運動機能や部活等）を今の岐女短のところに残し、日常・普段はまちなかで地域と連携しながら学習するなど、様々な方法はあるので検討材料にしていきたいです。

キャンパスデザイン、それこそ広義の「デザイン」ですけれども、数多くの手法があるので、その決定は時間をかけるところだと思います。

○杉山委員長

設置基準はおそらく私が言ったことで市の発言ではありませんが、ただ法令ですので、そこをどうするかという問題は出てくるだろうと思います。

別に今グラウンドがある場所ではなくても、市内で空間があればよいわけですから、またそれは考え方ですよね。何が重要かということから考えればよいことですので、そこは先生の仰るとおりかと思います。そうは言いながら、設置基準はどうしても守らなければならないのが現実です。

そうしたことも含めて、まちの中で人を育てるとするのは面白い発想だと思っていますが、実際に学生を受け持っている河野委員はいかがでしょう。

○河野委員

なぜ大学に来て授業をするのか、といったことを以前学生と議論したことがあり、今は Web 上に動画などインプットするものがたくさんあるので、それでよいのではないかということを学生は結構言っていました。ただ、では学校に行く理由は何だろうという議論をした結果、仲間と同じ課題に対して議論し、自分の意見だけではなく人の意見も聞き、自分と違う意見もあることや多様性を学ぶということを言っていました。また、あわせて新しい意見を出すことも大学の講義の意義の一つであるということでした。

ただ、仰ったように、インプットのような講義をする大学ではなく、もちろんインプットはするのですが、PBL という言葉も結構出ていたかと思いますけれども、PBL の先というような形でどんどん動いて、フィールドとして先ほどの岐阜市の商店街など様々な場所を使って、試行錯誤しながら、スタートアップ的と言うとプロトタイプと言いますが、いろいろと試行や失敗をして、それを経験として積むことができる大学だということをメッセージとして見せられるとよいのではないのでしょうか。

12 年後の大学の講義は、多分もう皆が座って聞いているようなものではなくなるのではないかと思います。

○杉山委員長

ありがとうございました。やはり五感だと思います。バーチャルの弱さと言いますか、記憶に刷り込むには嗅覚など、知覚だけではないものがあります。触覚もあります。そうした意味では失敗をする経験などをどう積んでいくかということで、市内で学ぶなど、フィールドというものは大事だと思います。

高校生を相手にしておられる小野委員はいかがでしょう。

○小野委員

私も、今回新しい資料を拝見したとき、メインキャンパスという言葉が出てきたことがすごく良いと思いました。まちなかに来るということはとても大事なキーワードだと思っていますが、それが分散型になると実は高校生は非常に嫌います。例えば工学部だけ別キャンパスにあると、もうそれだけでその工学部の人気低下につながります。今の高校生たちはバーチャルに囲まれていますので、だからこそ人と人との繋がりをとても大事にしていますので、まちなかの空いたところを学びに使うのはよいことですが、やはりベースとなるメインキャンパスは絶対に必要だと思います。

私のイメージでは、岐阜駅に近いところにメインキャンパスを置いて、そこをベースにしながら、具体的な学びの場面では、例えば柳ヶ瀬などに前線基地を設けて、そこで学びを進めていくということを想定していました。高校生たちは今の時代だからこそ人と人との繋がりをとても大事にしていますので、やはり人と人が直接つながれるメインのキャンパスがないと多くの高校生は選ばないと思いますし、まして名古屋から来ることはあり得ないのではないかと思います。その意味でもメインキャンパスはぜひ大事にしていきたいと思います。その上で、PBL で外に出て行くという形がよいのではないかと私は思っています。

○杉山委員長

やはりどこかに一つかたまりがないと、なかなか不安定な状況になるのは確かだと思います。

○斎尾委員

1つのメインキャンパスという場合の2つの案ですが、1つ目は、現・岐女短のキャンパスをメインキャンパスとし、リニューアル整備し直して、プロジェクト的な地域連携学習ではまちなかに出て行くというやり方と、2つ目は、市の中心部・まちなかに新しい敷地を確保して、そこに新しいキャンパス整備をしていく方法で、こちらの場合は、岐女短の元キャンパス再生・再活用計画は一体だと思います。施設整備予算については、後者の場合、新キャンパス整備に十何億だけではなく、元のキャンパスをどうするかは何億かかるということがプラスになるのではないのでしょうか。

要するに、市のまちづくりや都市再生政策の一環として、新大学の空間整備をうまく位置付けられれば、市民の応援を得られやすくなる、ということかと考えます。移動元・移動先と市のまちなかの都市再生、包括的なキャンパス計画が必要かと思いました。

○杉山委員長

それも含めて素案が提示されているとの理解です。今仰ったことをどうするかも全部含めての提案ですよ、今の素案というのは。

○田中大学改革推進参与

ありがとうございます。キャンパスをどうしていくかを考えるには、まちづくりという観点から見るのが重要とのご指摘をいただきました。そのような意味では、仮に中心部に移転するとすれば、今のキャンパスがどうなるかということも含めてまちづくりであり、大きな意味での計画だということは認識しております。

現時点で中心部に移転するかどうか、それがどこになるかをまだ決定できていませんので、それと連動して、仮に移転する場合に今の岐女短の敷地がどうなるのかについて全体としてお示しできていないのが現状です。

それらが一体性をもっていることは理解していますが、それを外に出せる時期やタイミングにずれが生じることなどはあり得ると思っており、具体的に新大学のキャンパス像を順次出していく中で、順々にそうした議論ができていくのではないかと現時点では思っております。

○杉山委員長

実際に岐女短があるところを、大田委員はどう感じておられますでしょうか。

○大田委員

計画全体を通じて、コンセプトから言うと、やはりまちなかにあるのが必須ではないかと個人的には思っています。単に学生が回遊するということだけではなく、市民の方や企業の方も相談に行きやすいようなプラットフォームとしてもよいと思いますし、市の設備と共通にしてもよいと思います。

時代の流れとしてはどんどん駅前に大学が戻っている状況にあり、駅からバスで20分というのは意外と距離感があるので、市の中央部に作るという計画には妥当性があるかと思います。

できれば新大学の新キャンパスというものも、気分一新ではありませんが、新しい学生を集めるには必要かと思います。

○杉山委員長

今の岐女短がなかなか難しい場所にあるというのは岐阜市民もお感じになっているだろうと思います。

中田委員、もし何かこれまでのところでご意見がありましたらお願いします。

まちづくりという観点なのですが。

○中田委員

まちづくりについて、大学のキャンパス立地に限らず、岐阜市でいろいろとお考えのことがきっとあると思います。それから、先ほど廣田委員からも強い要望といいますか、願いが出されていたかと思います。そうであれば、もし岐阜市のまちづくりや市街地の開発といったものが岐阜市のぶれない政策としてあるのならば、大学の設置はそことセットになって、まずは岐阜市全体としてのそうした大きな政策にコミットして高等教育機関をまちなかに展開するという、そちらの方から先に方向性を示していただけるとよいと思います。そして、それに即した大学づくりをした方が、後でいろいろなアイデアを組み込んでいけるのではないのでしょうか。

今、大学の中身の方を先に決めてしまっても、時代の状況が大きく変化して、これは違ったなとなるかもしれません。そのようなとき、岐阜市の大きな政策とセットになっていれば、そこだけはぶれないところとして貫きつつ、教育内容については柔軟に考えていくようなやり方もあるかと思います。これはただの考え方の話ですけど。

それから、8年後の開設といった時間的設定がキャンパス立地に由来するものであれば、むしろ8年という数字が先に出てくるとこと自体が私が申し上げたような方向性をそこに内包していると思うので、それにふさわしい形でやっていけばよいのではないかと思います。

例えば、4年後くらいに開学し、現在の短大の施設で繋ぎながら、4年後にはまちなかの新キャンパスができていくような筋道が、考えられないのかもしれませんがもしできるのであれば。大きな政策に依拠しながら、後は工夫を重ねて繋いでいくことができないだろうかと思っています。

これはあくまで素人の意見ですので、ただ思ったことだけですが。

○杉山委員長

ありがとうございます。先ほど斎尾委員からもありましたように、「基本計画の位置付け」の中でまちづくりがしっかり入ってくることが重要かと思います。また事務局で検討いただければ幸いです。先ほどの斎尾委員のご意見ともつながる話かと思いますので。

吉田委員、最後に何かご意見があれば頂きたいと思いますが。

○吉田委員

私もまちづくりは専門ではないので素人的な意見になってしまうかもしれま

せんが、最初の方にあった「学生」をどう見るかといった話で、高校生を主体として見ると、やはりワンキャンパスが求められるかと思いますが、一方で、他の大学もワンキャンパスでやっているの、差別化という意味合いも含めて、そこを目指さない高校生を集める大学として方向性を示すとか、あるいはリカレントも含めて、社会人も通ってもらえるような大学という形で、コンパクトなキャンパスをまちの中央にもってきて、ある程度分散してまちなかで授業できるようにする形もあるかと思いました。

コンピュータの世界ですと、よくスケーリングという手段をとりますが、最初は小さく作っておいて、必要に応じてどんどん増やすという形のアプローチをこれからのキャンパスは目指してもよいのではないかというのが素人的な意見です。

○杉山委員長

不確実な時代の中で、ある程度柔軟かく動けることも非常に重要かと思います。

皆さまご協力ありがとうございます。本日はこれでお開きにしたいと思います、いろいろなご意見が出てきたと思いますので、また事務局で整理いただき、次回へという形でよろしいですか。

それでは時間となりましたので、これで事務局にお戻しします。また整理していただいて、次の会議でよろしくお願いします。

○久富企画部次長兼総合政策課長

本日は、大変活発なご議論をいただき誠にありがとうございます。頂いたご意見を踏まえ、また次回に向けて事務局の方で検討を進めてまいります。

次回の会議は10月を予定しております。また事務局より日程調整をいたしますので、よろしくお願いいたします。

それでは、以上で本日の会議を終わります。お忙しい中ありがとうございます。